
資 料

たまり場から展望する多文化共生
—フィリピン食料雑貨店サリサリストアの「長いす」を事例に—

小林 孝 広^a

Multicultural symbiosis from the viewpoint of gathering spots in
Filipino groceries

Takahiro Kobayashi^a

(^a Advanced Research Center for Human Sciences, Waseda University)

(Received : April 28, 2010 ; Accepted : July 7, 2010)

Abstract

In 2007, the number of Filipino residents in Japan exceeded 200,000, more than 150,000 of whom were long-stay travelers with the status of Permanent Resident, Spouse or Child of Japanese National, or Long-Term Resident. Under these circumstances, Filipino groceries, or “sari-sari stores”, are steadily taking root in Japanese society.

The present report focuses on the roles of “couches” in sari-sari stores in Japanese communities. The results of surveys and a study of “modernology” on “couches” revealed that “couches” act as gathering spots not only for Filipinos but also for Japanese in Japanese communities.

Recently, at this spot NPOs who support foreigners’ lives are being established. Through the process of multicultural symbiosis, social inequalities between the majority and minorities are often concealed, but in this case, the soft harmonization of the Japanese and foreign residents show an alternative way by sharing the same keyword; “difficulty of living” in Japanese society.

Key Words : sari-sari stores gathering spot multicultural symbiosis

はじめに

2007年、フィリピンの外国人登録者数が初めて20万人を超えた（法務省入国管理局2008）。2005年12月の入管法改正により、2004年をピークとした「興行」による新規入国者数は、2009年末現在約3200人とほぼ25分の1に激減したが、滞在の長期化を意味する「永住者」、「日本人の配偶者等」、「定住者」資格によ

る滞在者数はこれまで毎年増加の傾向を示し、約16万2000人あまりを数える（法務省入国管理局2009）。

外国人労働者を含めた現代の移民の特徴を指して、移民の地球規模化、移民の加速化、移民の多様化、移民の女性化と言われて久しい。なかでも移民の女性化とは、移民における女性の社会的経済的重要性の高まりを示すものである。

80年代以降、フィリピン女性労働者の流入は著し

^a 早稲田大学人間総合研究センター (Advanced Research Center for Human Sciences, Waseda University)

い伸びを示したが、初期移住者からすでに20年以上の時が経過し、彼女たちの日本における社会的位置も多様化してきている。M. Morokvasicのビデオ作品Being Your Own Bossは「エンターテイナーの職や家事を離れて工場で働き、自営業を起し、さらには日本人の夫の雇用まで創出する」女性たちの姿を描いている。

在日フィリピン人のエスニック・ビジネス⁽¹⁾に関する研究の蓄積は少ない。このことは、高畑が指摘する在日フィリピン女性の日本社会への定着の特徴⁽²⁾に起因しているのではないかと筆者はそう推察している。すなわち、婚姻を契機とした家族形成と定着の傾向は、集住しないという在日フィリピンコミュニティのあり方を生んだ。中国、コリアンやブラジルのそれとは異なりエスニックタウンや大型ショッピングモールを形成しないため、彼らのエスニック・ビジネスを見えにくくしているのではないかと。しかしなお、彼女らのビジネスは確固として存在している。

本報告の目的は、このようなフィリピン女性が経営するサリサリストア、そこに置かれた「長いす」に着目し、それが地域社会においていかなる意味を有しているかを明らかにするところにある。

(1) フィリピン本国のsari-sari storeのあり方

サリサリストアとは、そもそもsari-sari (さまざま) が示すように、食料品をはじめとした日常の

様々な生活雑貨を扱う比較的小規模な店を意味する。フィリピン本国では、都市・農村を問わず至る所に散見できる小さな商いである。フィリピン国内において外資によるコンビニエンス・ストアの進出が遅れている一因として、身近に多いこの店の存在が指摘されることもある(川端2005)。表1に明らかのように、sari-sari storeは規模も様々で、多くは自宅の一部、例えば勝手口や玄関先を利用したものなどであり、通常「〇〇おばさんの店」と呼ばれる。こうした店は、育児や病気などの理由があっても女性が自宅で得られる副収入の機会として、世帯の生計上重要な部分を占めている。

sari-sari storeで欠かせないのは、「長いす」(polongko-an)の存在である。店先にはしばしば客用の長いすが据えられ、買い物に寄った女性たちや、子供たち、そして夕刻には酒を酌み交わす男たちなど、日がな一日、人出がたえることはない。長いすは、その日あった些細な出来事やうわさ話に花を咲かせる近隣住民たちのコミュニケーションの中心核となっている。

(2) サリサリストアS

サリサリストアと呼ばれる日本国内のフィリピン食料雑貨店は、カトリック教会周辺やフィリピン・パブのある繁華街の中に見つけることができる。看板や店先にはフィリピン国旗をあしらったデザイン

表1 ビサヤ地方のsari-sari store (小林2008a)

	オダイ (仮名女性: 33歳)	ベックベック (女性: 30歳)	フダ (女性: 50歳)	ビリン (女性: 52歳)
店の名前	特になし	JECK & BECK STORE	特になし	VIRING STORE
現在の資本規模	約3000ペソ	約10000ペソ	約6000ペソ	約1000ペソ (通常は5000ペソ位)
開業時期	2005年3月	2005年1月30日	2005年1月17日	2001年
店の立地と形状	宅地内、据え置き型	道路沿い、独立店舗型	宅地内、据え置き型	道路沿い、独立店舗型
世帯構成	父・母・妹・夫・息子2	母・妹・夫	夫・息子	夫・娘2
収入源	母(魚商)、夫(市場監視員)	夫(消防士)	夫(養魚地、ヤシ酒)	夫(魚商、水田、家畜、牡蠣養殖、井戸掘り)、本人(魚商)
前職	マニラで洋服の販売	レバノンで家政婦(1994-2004)	魚商	魚商(現在)、15年前に市場内でサリサリを経営
開業の契機	夫の就職、家計補助	自宅でできること、家計補助	病気、家計補助	家計補助
資本金の準備	夫の収入から(1000ペソ)	夫の共済組合からの借入れ(3000ペソ)、建物6000ペソ	マニラの娘からの送金(3500ペソ)	マニラの息子からの援助(5000ペソ)、建物は夫が建築する。
営業時間と店番	06:00~20:00、本人、(妹)	05:00~20:00(それ以外でも対応するが私の判断)、本人	06:00~20:00(それ以外でも対応)、本人、(夫)	07:00~20:00、夫、本人
商品の仕入れ	本人、イビサン市場内のRica store、支払いは現金	夫とバイクでロハス市のショッピングセンター、イビサン市場内のAlma, Egree, Rosemarie storeなど決まっていない、現金	本人、イビサン市場内のEgree Store、現金	夫とロハスのショッピングセンター、現金、借金は嫌いである。
売り上げの用途	仕入の資金+子供の学費、テレビの月賦、電気代	仕入の資金	仕入の資金+ソフトドリンク・テナパイなど自家消費分にあてる	本業である魚の仕入れの資金とし、その利益を仕入れの資金とする
信用貸し	約1000ペソ	約2000ペソ	約2000ペソ	約1500ペソ
信用貸しのマネジメント	借金の限度額を設定、子供を回収に使う。	日曜日に回収、借金が一週間を超えた者には次の付け買いを認めない。	回収を土、日に設定し現金をもつ時間帯に回収する。	回収に子供である娘を使う。直接は恥ずかしい(mahuya)。支払いを待つのみである。
ライセンスの有無	ない	取得した。(130ペソ年)	道沿いがないので必要はない。	知り合いがいるので支払わないで済む
備考	親類優先という考えはあるが、うちには他の店にない電池、マニキュア、文房具を置いているからよその店からも客が来る。	「自分の判断が重要である」という考えはレバノンで身に付いたかも。店を大きくしたい。	身体を治して早く魚商に復帰したい。店番は退屈である。	イロカノ出身。現地のイロコノ語習得がたいへんであった。店だけでは子供を高校、大学へは行かせることができない。

が用いられ、それがサリサリストアを見つける目印になる。店の内部には、しばしば*sari-sari store*の「長いす」の役割をもつ空間が存在する。

サリサリストアSは、東京郊外M市（現在人口約7万3000、外国人登録人口約1000人、うちフィリピン国籍は約150人を占める）の駅前商店街に2003年に開業している。立地選択の理由は、店舗が、月に2度、フィリピン人向けにミサが行われるカトリック教会への道筋に位置するからである。ミサのひけた時間帯には、商店街の道は大勢のフィリピン人男女でごった返す。店の提供しているホームページによれば、営業内容は、フィリピン食材販売とレストラン経営の二本立てである。この店は中規模の部類に入るといえるが、周囲約10キロがその商圏であり、そこに3、4軒の競合店があるという配置が、この店を取り巻く状況になるという。

営業時間は、朝の10時半から翌早朝の6時（土日は23時）までとなっており、深夜以降は、フィリピン・パブの閉店した後に流れ込む客が多い。店舗は、通りに面して食材・雑貨の販売スペースがあり、レジを境にして、その奥にテーブルが三脚置かれたレストランスペースがある。店からは終日、フィリピンの衛星チャンネルのタガログ語と、レストランスペースでくつろぐ客の談笑が聞こえてくる。

店で提供される商品は14品目、499種に及び、食料品以外にもレンタルビデオ、衣装、化粧品の販売などをあわせて行っている。店内に陳列される商品の多くは、都内に4店ある卸問屋を通じて仕入れた輸入商品であるが、売れ筋の一部のフィリピンスナックや冷凍加工食品は、都内の工場で生産されたものである。店の売上高の割合をみると、約4分の1を占めるのが、レストランでのフィリピン料理やビール類の販売である。それに、飲料、スナック類、缶詰、化粧品といった生活雑貨の売り上げが続く。食材を購入していくお客によれば、フィリピン人の友人同士が集まる時は「どうしたってフィリピンの味」が必要になるのだという。日常のちょっとしたおかずのためだけでなく、パーティー食材を入手するためにもサリサリストアは欠かせない存在である。

店舗の内外には、スナックの求人、結婚相談、介護士のセミナーなどに関するチラシが数多く貼られ、店内におかれている幾種類ものフィリピン人向けのフリーペーパーとあいまって、店自体が一つのメ

ディアとなっている。

2. 営業までの経緯

店は、再婚同志である日本人の夫Aさん（39）とフィリピン人妻であるB（54）さん、そして妻の叔母に当たるフィリピン女性のCさん（52）、日本人の夫を持つ同じくフィリピン女性パートのDさん（27）の4人で切り盛りされている。フィリピン人妻のBさんは1980年来日している。ビサヤ地方レイテの出身で、のちに家族と共にミンダナオのダバオに移住した。自宅には小規模の*sari-sari store*があり、幼少から店番の経験がある。大学に進学するも経済的な理由で中退している。死別した前夫（工務店を経営）とはフィリピンで出会い、1980年の来日とともに結婚し家庭に入った。娘たちはすでに独立している。今のサリサリストアを経営する前に（1990年頃）、小規模ながら自宅でサリサリストアを経営していたことがある。当時、夫は妻の商いには無関心で、細々とした営業であったという。そこで扱われる商品も、日本に暮らすごく親しいフィリピン人の友人たちのリクエストに答えるかたちで、帰国時に手荷物で持ち込んだごく少量の商品に過ぎない。現在営業しているサリサリストア（彼女はこれを「ビジネスとしてのサリサリ」と表現）に比べて、それはある意味で利益を度外視した、むしろ友人たちの親睦を目的にした「遊び」のようなものであったという。このような形態のサリサリストアは、インタビューの際、しばしば耳にするものである。それは自宅アパートの玄関先やマンションの一室を利用したものや、知人の経営するフィリピン・パブの店舗の片隅に缶詰をいくつか置いただけといった小規模な商いに過ぎないが、おそらく表にでないこの種のサリサリストアは当時、相当数に上ったと考えられる。さて、Bさんの「経営」していた小規模なサリサリは、わずか数ヶ月で閉じることになった。前夫と死別した後、現在の夫に出会うまで、彼女は学齢期の子供を抱えながら弁当工場で働き家計を支えた。

先に「遊び」と形容されたエスニック・ビジネスの萌芽は、日本人の夫との関わり次第では大きく発展する可能性を秘めている。店舗を持ち、規模を拡大するには、開業の資金もさることながら、様々な法的諸手続が必要になり、そのためには高度な日本

語が要求される。フィリピン女性本人だけでの起業は困難になることが多い。サリサリストアSは現在のご主人Aさんの協力を得て、大きく発展したケースといえるだろう。彼はこれまでに商売の経験を持たない全くの素人であったが、妻と協力しながら試行錯誤末に開業にこぎ着けた³⁾。

3. 「長いす」の利用実態とその管理

(1) 店はフィリピン人のために

店でのAさんの基本的な姿勢は「あくまで裏方に徹する」というものである。この店が「フィリピン人の店」であるからだという。「自分がこの店の主人である」という顔をしないともいう。実際、人手の足りないとき以外、彼は店先に立つことはなく、店の奥で帳簿付や宅配便の発送作業を行っている。そして「(営業上は) 妻Bさんの判断に従う」という姿勢を貫いている。

店舗はうなぎの寝床状に細長く、入り口に入って商品の陳列スペース、途中のレジを挟んでその奥にレストランスペースがある。このレストランスペースがsari-sari storeの「長いす」に相当する。レストランがないサリサリストアでは、しばしば、長テーブルにイスが据えられている。このレストランスペースはあくまでも「フィリピン人のための場所」と考え、入り口にも特に日本人を意識した案内はしない。また、日頃レストランスペースは照明が切られており、そこから見た目にはレストランがあることには気づかない客も多い。

レストランスペースの日本人の利用は選択的に行われている。これは、Aさん夫妻の「あうんの呼吸」で決まるという。お客を選んで奥に通すのだ。以前に、たまたま奥に通した日本人の客がレストランでくつろぐフィリピン人女性に対して不愉快な思いをさせたという苦い経験があるからである。筆者自身も遭遇したことがあるが、酔った日本人が語り出す「貧しいフィリピン人が豊かな日本にやってくる。だからフィリピン人はそのためには何でもする」というステレオタイプの言葉に、同席していたフィリピン人たちの間であって居心地の悪い思いをした。「(店の売り上げにとって結果的に良いことかわからないが) 客が店を選ぶように店も客を選ぶことがある」と、Aさんは店側の選択を強調している。

ではつぎに、このレストランスペース、すなわち

表2 顧客の行動 (小林2008b)

入店時刻	退店時刻	エスニシティ	性別	年代	買物の有無	長いすの利用	食券の有無	支払い	備考
10:25	5:55	J	M	A	○	○	○	○	調査者
10:30	11:30	P	M	A	○	○	○	○	三人のグループ
		P	F	A		○	○		
		P	F	A		○	○		
10:37	10:38	P	F	Y	○			○	
10:38	10:40	P	F	A	○			○	
11:00	11:15	P	F	Y	○			○	
11:15	11:15	J	M	A		○			
11:25	11:38	P	F	A		○			
11:40	11:46	P	F	A	○	○			
11:46	12:40	P	F	Y		○	○	○	
12:40	13:00	J	M	O	○			○	
12:50	12:51	P	F	A	○				親子連れ
		J	F	C		○			*ジュースを置く
		J	F	C		○			
13:50	14:15	J	M	A	○	○		○	
14:29	14:34	J	M	A		○		○	
14:42	14:45	P	M	A	○				10:30と同じグループ
		P	F	A		○			
		P	F	A		○			
14:50	14:50	J	M	A		○			
15:13	15:25	P	F	Y	○			○	
16:10	16:12	P	F	A	○			○	親子連れ
		J	F	C		○			
16:30		P	F	A	○			○	
17:17	17:43	J	M	A	○	○		○	
17:35	17:38	J	M	A	○				二人連れ
		P	F	A					
17:50	18:08	P	F	Y	○	○		○	
17:55	17:56	P	F	A	○			○	
17:56	18:06	P	F	Y	○			○	
18:10	18:12	不明	M	A	○			○	二人連れ
		不明	M	A					
18:33	18:40	P	F	A	○			○	

18:35	18:43	P	F	A	○			○	
18:51	18:55	P	F	Y	○			○	
19:00	19:07	P	F	Y					
19:05	19:07	P	F	Y					
19:05	19:28	不明						○	二人連れ
	9:28	不明						○	
20:10	20:13	P	M	Y	○			○	
20:30		J	M	A	○			○	
20:54	20:55	J	M	O	○			○	
21:05	21:25	P	F	Y	○	○		○	
21:10	21:12	P	F	A	○				親子連れ
		J	F	C		○			
21:25	21:33	J	M	A	○			○	
21:40	21:43	P	F	Y	○			○	
22:10	22:45	J	M	A	○	○			
22:30	23:25	P	F	Y	○	○		○	
		J	M	A	○	○		○	
0:20	0:25	P	F	Y	○				22:10の響り
		P	F	Y	○				22:10の響り
0:20	0:54	J	M	A	○	○		○	22:10と同一人物
2:24	2:55	P	F	Y	○	○		○	
2:27	3:21	P	F	Y	○	○		○	三人のグループ
		P	F	Y	○	○		○	
		P	F	Y	○	○		○	
	5:45	J	M	A	○	○		○	22:10と同一人物
2:38	5:45	J	M	A	○	○		○	
3:10	3:15	P	F	Y	○			○	二人連れ
		P	F	Y					
3:40	4:25	J	M	A	○	○		○	五人のグループ
		J	M	A	○	○		○	
		J	M	A	○	○		○	
		J	M	A	○	○		○	
		P	F	Y	○	○		○	
3:58		P	F	A	○	○		○	
5:10	5:15	P	M	A	○				四人のグループ
		P	F	Y	○				
		P	F	O	○			○	
		J	M	A	○				

備考：表中のエスニシティは、当日パートで働いていたCさんの判断に従った。Jは日本人、Pはフィリピン人である。性別はFが女性、Mが男性を示す。年代はOが老齢、Aが壮年、Yが若年、Cが児童を示す。

「長いす」がどのように利用されているのかみたい。

(2) 「長いす」の利用の実際

表2はある平日の客の行動を時間を追って記録したものである。午前中から午後にかけて、子供を連れたフィリピン女性たちが訪れ、夕方は仕事帰りのフィリピン人男性、夕食後はフィリピン人妻と連れ添って来店した日本人夫たちがビール片手にフィリピン談義に華を咲かせている。ビザ手続きの情報交換や、近々フィリピンに向かう友人に実家宛の荷物を託すのも、この長いすのスペースである。しかし、深夜以降の時間帯は周辺のフィリピン・パブがはけた後、タレントのフィリピン人女性と日本人男性グループが来店し、それまでの時間とは異なる、また独特の盛り上がりを見せる。このように、客層は時間帯によって大きく3つに分かれる。深夜帯をのぞいて、フィリピン人客たちの多くは、食事をとる、とらないの別なく長いすを利用して、長いすが彼らの「たまり場」として機能していることが見いだせる。

4. 「たまり場」を母体に生まれる多国籍の人の輪

この「たまり場」は、フィリピン人客、または、連れの日本人夫たちが集う場として機能するばかりではない。日本人男性Eさん(50)も常連の一人である。Eさんは、地元の市役所で長く外国人相談の窓口業務に従事していた。その経験と人脈を活用し、無償で様々な生活相談に乗っている⁽⁴⁾。筆者が出会った際は、フィリピン人若夫婦が公営住宅に入居するための相談に乗っていた。近在のフィリピン人たちにとってこの店は馴染みの場所である。

このたまり場は、近隣大学のゼミコンパでも利用される。筆者も参加したことがあるが、夕方、マイノリティ研究のゼミの教員、学生が10名ほどやってきた。エスニックフードを味わい、フィリピン文化について学ぼうというのが会の趣旨であった。Eさんは、個人的に高校進学相談をしていたフィリピン人の母を持つ中学生のグループに声をかけ、にわか交流会が持たれた。中学生たちは、大学生の生活について尋ね、大学生たちは中学生たちに将来の夢を尋ねていた。

近隣の大学で、フィリピン人母子支援と子どもた

ちの学習支援を行っているFさんにも、しばしばここで会った。主にカトリック教会を入り口にして支援活動を行っているFさんによると、「サリサリストアは宗教にとらわれない人々交流の場であり、臨時の就業の機会でもある」という。急なパーティなどが店である場合、アルバイトが雇われるからである。

現在、EさんとFさんを中心に、外国籍住民を含めた地域生活支援のNPO立ち上げが模索されている。興味深いのは、このサリサリストアのたまり場をモデルに、多国籍のたまり場を設けることができないかと、その必要性を訴えていたことである。他の外国籍住民たち(中国、韓国)にとって気軽に集えるこのような場がないというのがその理由である。

また、併せて、地元の少女スポーツチーム、Eさん中心の生活よろず相談、財政基盤強化のための身障者の移送サービスなどを、緩やかに結びつけた活動を目指している。Fさんを中心とした学習支援は、家庭の事情により、幼少期に日本とフィリピンにまたがって教育を受けざるを得ず、日本での学力に不安を抱えた子どもたちの支援である。少女スポーツチームは、夜7時から9時まで活動しているが、外国籍住民を含む母子家庭の子どもたちを多く抱え、夜遅くまで働く親に代わって子どもたちを預かる意味を持っている。

近年、「多文化共生における多文化主義が通常、マジョリティとマイノリティの社会的な不平等を隠し持つ」点が指摘されている(宮島1999など)が、このEさんやFさんが描く地域生活支援の理念は、生活の中で共に感じる「生きにくさ」をキーワードに日本人、外国籍住民の別なく統合してゆこうとする点でユニークな取り組みであるといえよう。

おわりに

サリサリストアは、来日フィリピン女性にとってなじみ深い、経済的な自立手段の一つである。サリサリストアは、「長いす」という装置を持ち、日本社会に暮らすフィリピン人たちと日本人が交差する、緩やかなコミュニケーションの場を提供している。サリサリストアの「たまり場」は、時間帯によって棲み分けられつつも、場の提供者である経営者夫妻によって主体的に、その場への出入りが緩やかに管理されている。あくまでフィリピン人のための場で

あることを前提にし、彼ら／彼女らの安心できるスペースを確保した上で、日本人客を招き入れる手立ては、フィリピン人たちと日本人が交差する条件を上手く作り出しているといえよう。

冒頭で、「サリサリストアの見えにくさ」について触れた。日本人男性との婚姻を契機とした家族形成と定着、その結果として集住しないという在日フィリピンコミュニティのあり方にその理由を求めたわけであるが、「見えにくいサリサリストア」はこのようなコミュニティにおいて、共生社会への確かな回路として存在していると言えるのではないだろうか。

謝辞：本研究は、早稲田大学人間総合研究センター・プロジェクト「多世代・多文化共生社会における社会・文化環境の構想」（平成18年－21年度、研究代表：店田廣文）の支援を得た。記して謝意を表したい。

註

- (1) ここでは「出資者ないし経営者がマイノリティに属しており、一定程度の同胞を意図的に雇用している企業または商店」という伊藤（1994）の定義を用いる。
- (2) 高畑は、在日フィリピン人の日本への定着の特徴を、第1に、フィリピン女性の数の多さ、第2に日本人との婚姻の多さ、第3に婚姻と家族形成による定住化の3点に集約している。（高畑1998）等を参照のこと。
- (3) サリサリストア経営における日本人ビジネスパートナーの役割については、小林2008aを参照されたい。
- (4) E氏は、地元M市出身者である。祖父は満州からの引き上げ団のリーダー的存在であり、戦後、この地では、旧開拓団の人々が開発の中心を担った。引き上げ団を受け入れたこの町は、戦前、結核療養病院の町であった。近年、住みやすさを求めてM市に転入するフィリピン人が多いという。彼らのいう「住みやすさ」を切り口に、この地域を歴史的に掘り下げて検討したいと考えている。

引用・参考文献

- 石井由香 1995 「国際結婚の現状 日本でよりよく生きるために」 駒井洋（編著）『講座外国人定住問題 第2巻 定住化する外国人』明石書店
- 伊藤泰郎 1994 「エスニック・ビジネス研究の視点」『社会学論考』15
- 川端基夫 2005 『アジア市場のコンテクスト【東南アジア編】』新評論
- 小林孝広 2008a 「越境する小商いサリサリストアをめぐって」『アフラシア』第6号 現代アジア・アフリカセンター
- 小林孝広 2008b 「東京郊外の在日フィリピン・サリサリストア」『アジア遊学』（特集・日本で暮らす外国人）勉誠社
- 白岩砂紀 2003 「エスニック・ビジネスの生成過程－広がるネットワークと起業家精神－」渡戸一郎、広田康生、田嶋淳子（編著）『都市的世界・コミュニティ・エスニシティーポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成』明石出版
- 高畑幸 1998 『『隠せないエスニシティ』から始まる職業経歴－在日フィリピン人の事例から』『人文論叢』第27巻 大阪市立大学
- 高畑幸 1999 「在日フィリピン人の職業経歴－栄4丁目の自営業者調査から」『人文論叢』第27巻 大阪市立大学
- 高畑幸 2002 「在日フィリピン人研究史」『市大社会学』（3）大阪市立大学社会学研究会
- 武田 丈（編著）2005 『フィリピン女性エンターテイナーのライフストーリー』関西学院大学出版
- 樋口直人・高橋幸恵 1998 「在日ブラジル出身者のエスニック・ビジネス」『イベロアメリカ研究』1
- 法務省入国管理局 2008 『平成19年末における外国登録者数について』入国管理局
- 法務省入国管理局 2009 『平成21年度版出入国管理』入国管理局
- マテオ、イバーラ、C 1999 『折りたたみイスの共同体』（北村正之訳）フリープレス
- 宮島 喬 1999 『文化と不平等』有斐閣
- Aldrich, Howard Eland Waldinger, Roger 1990 “Ethnicity and Entrepreneurship”, Annual Review of Sociology, 16